Jichi 地域連携ニュース

・「感染症の専門家」って何でしょうか？… 笹原　鉄平
・呼吸器内科　科長・教授就任のご挨拶　… 前門戸　任
・「仕事に関すること」病院で相談できます
・治療と仕事の両立に関する相談会
・自治医科大学附属病院医師同門会について
・FAXによる患者様紹介について

「感染症の専門家」って何でしょうか？

感染制御部　部長　笹原　鉄平

2023 年 1 月より附属病院感染制御部長を拝命いたしました笹原鉄平です。マスクの性能の違いが感染対策の決定的差ではないということを伝える日々を送っております。当学に大学院生・非常勤医員としてお世話になり始めてから 17 年が経ちました。元は北海道人ですが、今では栃木をこよなく愛し、十数年前からは本籍地を下野市薬師寺 3311-1 に登録しておりますので、よろしくお願いいたします。

さて、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行においては、数多くの「感染症の専門家」が連日テレビに登場し、時に物議を醸しながら番組を盛り上げました。よく「テレビに出ていた〇〇先生って知合いですか？」と尋ねられることがありますが、知っている方は少数で、名前を初めてお聞きする方もいます。ということを家族に話したらビックリされたので、今回は自己紹介も兼ねて「感染症の専門家」について触れていきたいと思います。

「感染症の専門家」とは？

この「感染症の専門家」というのは結構乱暴な分類でして、例えば「音楽関係の仕事をしています」と同じくらいザックリしています。音楽関係の仕事、といっても歌手、演奏家、楽器職人、プロデューサーなど、内容は様々でしょう。感染症の業界は、医学以外の分野、例えば獣医学・薬学・農学など、かなり広い領域にまたがっておりまして、微生物そのものの研究をしている方、それに対する生物の応答を専門にしている方、薬やワクチンを開発している方、感染症の診療や治療を行う医療従事者、感染を拡げないための対策を行う行政職、など、これらすべてが「感染症の専門家」です。ピアノが弾けても三味線をすぐに弾けないのと同様に、感染症分野におけるそれぞれの専門性にも大きな違いがあります。例えば「感染症診療」と「院内感染対策」の 2 つは、実務上は近い位置に存在していますが、求められる技能は全く異なるため、それぞれ独立したトレーニングを要します。「未知の存在であった COVID-19 に対して国はどうするべきか？」というテーマについて、多くの「専門家」がテレビで発言していたのは皆さんも知るところです。本来は尾身茂先生（自治医大 1 期・なんと私の学位審査委員でした！）のようにグローバルな規模で感染症対策のオペレーションを経験された方以外は、このテーマに関しては素人に毛の生えた程度だったはずなのですが・・・。ワクチンや治療薬についても同様で、「あなた、医療現

場見たことないでしょう」という方が患者治療について解説している様子はコントとしか映らず、「テレビは鵜呑みにしてはいけない・・・」と思うわけです。まあ、彼らは番組から「専門家（という名の役者）」の立場でストーリーを進めるコメンテーターの役割を求められているわけですね。ただ、その影響で「感染症の専門家」に対する一般社会のイメージが悪くなっていないか心配ではあります。

「感染症の専門家」を目指したワケ

皆さんは、ウォルフガング・ペーターゼン監督の1995年の映画「アウトブレイク」をご存知でしょうか。エボラウイルスをモチーフにした致死性の高いモターバ・ウイルスが米国の田舎町で大流行し、ダスティン・ホフマンが演ずるサム・ダニエルズ大佐（陸軍所属の感染症専門家）が立ち向かう、というストーリーです。映画業界での評価は高くないようですが、今でも楽しめる作品と思います。「感染症による人類的危機に立ち向かう」という、いかにもカッコいいテーマは、中二病をこじらせて「感染症の危機」をテーマにした書籍を読み漁っていた私の心を十分に刺激するものでした。そもそも医学部を目指したのは中学生時代に「国境なき医師団」のドキュメンタリーを見たのがきっかけでしたので、思えばテレビや映画に影響されやすい人生ですね。

現在、「感染制御部」や「感染症科」といった部門が設置された病院が徐々に増えてきていますが、90年代後半当時の日本には「感染症を横断的に診る臨床医」や「院内感染対策の専門家」が殆どおらず、国内で「感染症を専門にしたい」といった場合には、基礎研究か公衆衛生の道を志すことが一般的でした。私が在籍していた札幌医科大学には、ポリオ対策を研究テーマにしている衛生学教室がありまして、低学年の頃に出入りさせて頂いておりました。が、「坊や」だった当時の私の頭脳では研究の面白さに気づくことができず、「思っていたのと違う」といつしかフェイドアウトしてしまいました。（可愛がって下さった当時の教授には今でも申し訳なく思っています。）

「感染症の専門家」への道に挫折した私は、次に「何でも診られるお医者さん」に憧れて、開講されたばかりの総合診療科に居候するようになりました。お世話になったのが初代教授の山本和利先生（自治医大 1 期生）で、何となくここで自治医大へのフラグが立った気がします。そこで、海外では「感染症科」なる診療科があることを聞きました。「どんなものか実際に見てきなさい」ということで、感染症科を設置している数少ない施設の一つであった聖路加国際病院の実習に参加しました。かくして牧歌的な大学の臨床実習しかしらない北海道人は、洗練された都会の研修病院の刺激的な 1 週間を終える頃には、すっかりのぼせあがって「感染症の専門家として一生食べていこう」と再度決意するに至ったのでした。

日本の臨床現場における「感染症の専門家」が少ない理由とは？

当時は臨床研修制度も整っておらず、卒後は母校または出身地元大学の診療科に直接弟子入り（入局）するのが一般的でしたので、実習中は各診療科からの勧誘も盛んでした。飲み会の雰囲気で入局先を選ぶ同期も多かった中、「感染症科志望ですので札幌医大には残りません！」と聞いたこともない診療科の名前を出してフリーエージェント宣言していた自分は、教員からは異様に映っていたことと思います。「感染症なんてやめておけ、終わった分野だ」「需要なんて無いぞ」「どの科に行っても感染症患者は診られるのに」など、ほとんどの教員は私の進路に対して否定的でした。「若者をいじめないでいただきたい。」と当時は思ったものでしたが、今振り返ると決

して意地悪でなく、当時の医師の一般的な反応のような気がします。当時の日本の医学部では、感染症の系統的な教育も行われず、感染症に関連する研究室の多くが統廃合されつつあったのですから。「日本ではなぜ感染症専門医が少ないか？」という現在になって議論されている問題の根本は20年以上前にあったのですね。（私に先見の目があったわけでは決してなく、「好きなことができれば、後は何とかなる」くらいに思っておりましたが、認めたくない若さゆえの過ちにならなくて本当に良かったです。）

「感染症診療」と「院内感染対策」

卒業後、国際医療センター病院（現在の国立国際医療研究センター病院）に拾って頂いて 3 年間ローテート研修をしました。その頃には米国で感染症診療を学んだ医師が続々と帰国し、少数ながら感染症科ができ始めておりました。自治医大病院では2004年に森澤雄司前部長が感染制御部を立ち上げられ、2005年に米国から矢野晴美先生（現：国際医療福祉大学教授）を招いて感染症科設立準備が行われておりました。その噂を聞きつけて見学に来た際に、自治医大近くの交差点で「笹原」という地名表示を発見し「運命だ！」と深く考えずに異動を決めました（実話です）。まだ感染制御部にはシニアレジデントの定数さえなかったのですが、細菌学部門の平井義一前教授の好意で大学院生の身分で研修を行えることになりました。縁もゆかりもない栃木県では外勤先もなかったので、思いがけず無収入の生活からスタートしてしまい、非常に困窮した時期もありましたが、結果として感染症診療・院内感染対策・細菌学研究の 3 つをバランスよく学ぶことができました。

本当のところ、地味なイメージがあった感染対策には当初全く興味がなく、感染症診療を主体に取り組んでいました。しかし、セレウス菌という微生物による病院内集団感染事例（ちょっとした社会問題となりました）をきっかけに、病院内で発生する感染症のメカニズムの解明や予防策の構築が主なテーマとして与えられました。感染対策は常に二手三手先を読んで行うスリリングな側面も持っている上、実務だけでなく感染対策に関する研究を自身で行うようにもなって面白さ・奥深さを知るに至り、感染対策を主な専門とするようになったのです。

感染制御部の今後の展望

当学・当院では、院内感染対策を担う感染制御部・感染症診療を担う感染症科といった臨床部門だけでなく、医学部の細菌学部門・ウイルス学部門・医動物学部門・感染症学部門など、感染症関連の研究部門も多く充実している国内でも珍しい機関です。当学・当院が持つポテンシャルを生かした感染対策を展開できればと考えております。また当院の感染制御部は、栃木地域の病院・福祉施設などの感染症対策を推進する組織である「栃木地域感染制御コンソーティアム（TRICK）」の中心的役割も担っており、今後、行政とも連携して貢献の場を広げていく計画となっております。学内外での様々な取り組みで、皆様にお世話になることと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

今や古書となった本の数々。今回の原稿執筆で、名著「ホットゾーン」の紛失が発覚し、ショックを受けた。

呼吸器内科　科長・教授就任のご挨拶

呼吸器内科　診療科長・教授　前門戸　任

４月１日より呼吸器内科教授を拝命した前門戸です。

本学の12期卒業です。卒業以来、初めて自治医科大学に勤めることになりました。

卒業後は、青森で９年間の義務年限を終了し、その後東北大学で学位取得し、20年間宮城県で働きました。その後岩手医科大学の呼吸器内科に教授として赴任し、今回、母校に戻ってくることが出来ました。

学生時代は勉強そっちのけでラグビーに没頭していました。当時のラグビー部は東医体も優勝が目標というより達成しなければならいないタスクの一つでした。このタスクは６年間のうち５年間果たすことができました。このラグビーから得られたものは多く、一つには部活で寝食を共にしたメンバーとの今でも続く交流です。道は違えども様々な場面で自らをサポートしてくれます。また、運動部で体力をつけることはもちろんですが、困難な状況でも持続してものごとに立ち向かうことができる精神力が養われます。これまでの経歴の中で、この経験が生かされてきたと自覚しています。この下野の地は自分の原点といえる地ですので、ここで初心に立ち返って努めていければいいと考えています。

自治医大卒業後は青森県での義務年限を行っていましたが、核燃サイクルで有名な六ケ所村の診療所にはトータルで４年間務めることになり、応急処置が中心でしたが救急隊の受け入れも行っており、専門にこだわらずにgeneralに対応しなければならない環境でした。また、地域のコミュニティと医療以外でも接する機会が多く、ある住民の会で住民の方から言われたことが印象に残っています。「我々にとっていい先生とはどういう先生かわかりますか」と質問され答えに困っていると、「ここに長くいてくれる先生だ」と話してくれました。その地域にいるとそこでのノウハウが蓄積されていき、よりその地域に有効な医師像ができあがるのだと感心したものでした。もちろん長くいることだけではなく、医療の質、人間性など様々な要素が必要となりますが、それらを兼ね備えて地域で長く活躍されている卒業生を含め先生方に敬服いたします。

義務年限内こういった地域での経験のもと自分自身では地域医療を一生おこなっていくのだろうとおぼろげながら考えていたところですが、それであれば一時期地域医療とは違う医療にも触れたほうがいいと思い、自治医大卒業生の後期研修として東北大学加齢医学研究所で１年弱研修をさせてもらいました。それがきっかけで義務年限終了後に東北大学に進むこととなりました。

東北大学では自治医大にも一時籍を置いた貫和敏博教授のもと分子生物学を学び、学位取得とその後の研究につなげることができました。ここでは、呼吸器内科の前教授の萩原先生が留学から東北大医局に赴任され、ご指導いただく機会に恵まれました。それから先は地域医療から離れ、肺癌診療・研究を中心に過ごしていました。

ここで自らが呼吸器内科を選んだことに関係する1980年代の自治医科大学呼吸器内科の思い出をご紹介します。当時は吉良枝朗教授から北村諭教授に変わったばかりで、吉良先生時代の影響が色濃く残っていました。チャートラウンドは午後７時ごろから始まり午後11時ごろまでかかりセブンイレブンと言われ、その中で活発な議論がなされていました。プレゼンテーションは主に研修医、学生が行っており、学生であった自分もプレゼンテーションを無難に乗り切ろうと、指導医と一緒に前日から周到な準備をして望んでいました。それでも、学生の発表をきっかけにディスカッションに火がついてしまうこともしばしばでした。とにかく臨床に熱心な教室でした。働き方改革が叫ばれている現在とは対極に位置し、当時だからできたことと考えています。しかし、時代は変われど医師に必要とされる素養は変わりません。現在のシステムでいかに若い先生方の医師としての力をつけさせてあげられるかが課題の一つです。自治医大では他大学からも注目される教育システムが整っています。伝統と現在、地域医療と拠点病院の医療。これらをうまく融合させて次世代の医師の成長を支援していければと考えています。どうぞよろしくお願いします。

「仕事に関すること」病院で相談できます

例えば

- 治療を受けながら仕事を続けたい
- 以前と同じように働けるか不安
- いつ、どのように仕事に復帰したらいいか？
- どのような支援制度があるか？
- 職場に病気をどう伝えたらいいか？
- 再就職したい

秘密厳守

十分な時間をご用意させていただくため、
事前に相談希望日時をお知らせいただくことをお勧めします。

お問合せ：患者サポートセンター（医療福祉相談室）
がん相談支援センター
脳卒中・心臓病総合支援センター
受付時間：午前9時～午後4時30分（月～金　※休診日を除く）
場　　所：本館1階 正面玄関西側　TEL：0285-58-7107（直通）

自治医科大学附属病院

治療と仕事の両立に関する相談会

定着

在職中・休職中の方

両立支援促進員
（栃木産業保健総合支援センター）
による相談会

◇日　時：毎月第２水曜日
10:00～13:00

就職

(再)求職中の方

就労ナビゲーター
（ハローワーク宇都宮）
による相談会

◇日　時：毎月第２水曜日
13:30～15:30

開催予定日　<毎月第２水曜日>

・2023年
4月12日　5月10日　6月14日　7月12日　8月9日
9月13日　10月11日　11月8日　12月13日

・2024年
1月10日　2月14日　3月13日

原則予約制

事前に相談希望日時を
お知らせください。

オンライン相談
できます！！

お問合せ：患者サポートセンター（医療福祉相談室）
がん相談支援センター
脳卒中・心臓病総合支援センター
受付時間：午前9時～午後4時30分（月～金　※休診日除く）
場　　所：本館1階 正面玄関西側　TEL ：0285-58-7107 （直通）

自治医科大学附属病院

自治医科大学附属病院医師同門会について

当病院では、OB医師を中心に「自治医科大学附属病院医師同門会」を組織し、総会・懇親会の開催や会報の発行等を行っております。

入会の条件は、「①自治医科大学附属病院で、医師・歯科医師として勤務経験があること、②同会の趣旨に賛同していただくこと」の２点のみです。会費は３年間で１万円です。

これを機会に是非入会をお勧めいたしますとともに、皆様方の周囲に当病院OB医師がおられるときは、当会の存在をご案内くださいますようお願いいたします。

入会に関する連絡・照会先は次のとおりです。

自治医科大学附属病院　医師同門会事務局（地域医療連携室内）　担当：松本、石山
TEL　0285-58-7461・0285-58-7463　／　FAX　0285-44-5397　／　e-mail　byoushin３@jichi.ac.jp

FAXによる患者様紹介について

当院では、FAXにより患者様の事前予約を行っております。事前にカルテの作成等事務手続きを済ませておくため、受診当日の患者様の事務手続きにおける待ち時間が短縮されます。是非ご利用いただきますようご案内いたします。

FAX事前予約受付（休診日を除く）月曜日から金曜日まで　午前9時～午後3時

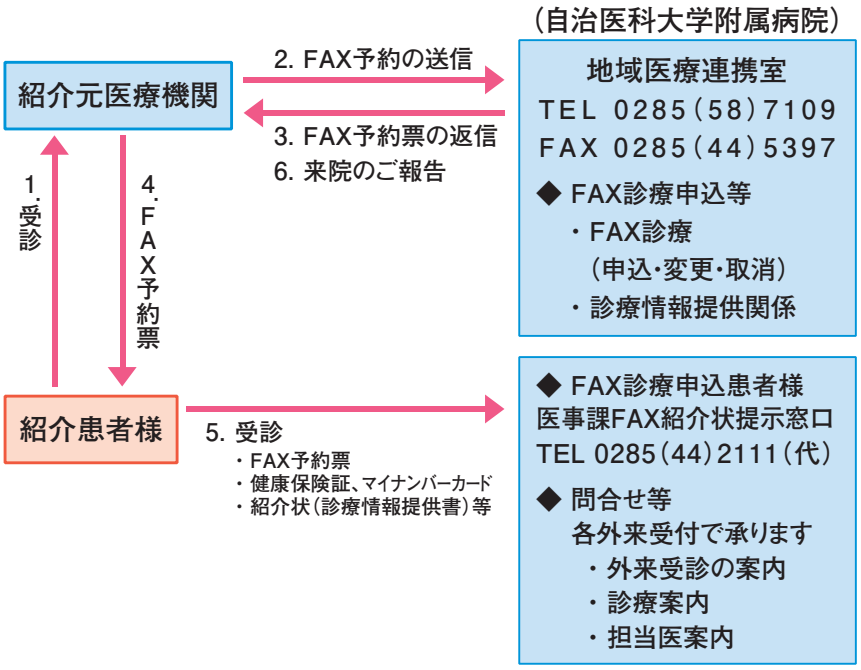
受付時間外にお送りいただいた申込書の対応は翌受付時間内での対応となります。

－ご注意－

- ◆ 医療機関以外（患者様本人等）からの予約受付は行っておりません。
- ◆ 受診当日の予約、および時間予約は行っておりません。
- ◆ 予約を変更（又は取消）される場合は、事前に**紹介元医療機関**から地域医療連携室までご連絡ください。
- ◆ セカンドオピニオン・治験の予約は、FAXによる受付は行っておりません。

＜FAX予約のご利用方法＞

1．「FAX診療予約申込書」を作成し、当院あてにFAX送信してください。FAX診療予約申込書は、当院のホームページ　（http://www.jichi.ac.jp/hospital/）より ダウンロードできます。
※腎臓外科・小児外科は「紹介状（診療情報提供書）」を併せてFAXしてください。
2．当院では予約をお取りし、「FAX診療予約申込書」を返信します。
3．患者様に「紹介状（診療情報提供書）」と「FAXによる診療予約票」をお渡しください。
4．来院日には、「紹介状（診療情報提供書）」と健康保険証を持参し、医事課・**FAX紹介状提示窓口**に提示するようご案内をしてください。



発行者　患者サポートセンター 地域医療連携室　TEL：0285-58-7461　FAX：0285-44-5397　Eメール：byoushin2@jichi.ac.jp